分離指数による性別職域分離の計測
―近年の研究動向を踏まえて―(要旨)

伊佐勝秀 (西南学院大学経済学部)

本稿では、近年の研究動向を踏まえつつ、分離指数による性別職域分離の計測を行った。実証研究者の間ではしばしば、分離指数はいわゆるダンカン指数と同一視されている。しかし 1980 年代後半以降、これ以外にも様々な分離指数が提案されている。その意味でダンカン指数は、数ある分離指数の一つにすぎない。加えて、この指数には計測上の問題点もあるが、そのことも広くは知られていないようである。そこで本稿では、複数の分離指数 (ダンカン指数と Hutchens 指数) を用いて、近年の日本における性別職域分離の計測を行った。その結果、一定の集計バイアスが見られることなどは両指数で共通しているが、ダンカン指数による計測結果では性別職域分離が緩やかな拡大傾向にあるのに対して、Hutchens 指数では寧ろ緩やかな縮小傾向が見られるなど、両指数時で系列的に一貫した順位付けが得られなかった。この現象の原因が何なのか、また他の指数 (G 指数など) による計測結果ではどうなるか、などの検討は、今後の課題である。